

いが、パスチュールをつけるのではっきり区別できる。日本新産。

3) *Parmelia grayana* Hue. 日本では長い間 *P. simodensis* の名で呼ばれていたが、1965 年に Hale は *P. grayana* に合併した。日本における産地として伊豆、下田、武山だけしか知られていなかったが、渥美半島、伊良湖岬で発見された。なお、本種がオーストラリアに産することも報告した。

4) *Sticta limbata* (Sm.) Ach. (コフキセンスゴケ 新称) エツキセンスゴケに似ているが、裂片の縁から表面にかけて粉芽をつけるので、コフキセンスゴケの和名を与えた。日本では北海道、根室と富士山五合目、小御嶽神社附近でしか採集されていない珍らしい地衣である。日本新産。

□津山 尚 編著： 日本の椿， T. TUYAMA (ed.) *Camellias of Japan*. Publ. by Takeda Sci. Found. Printed & distrib. by Hirokawa Publ. Co. Tokyo 1969. 武田科学振興財団発行、広川書店発売 全 2 卷、昭和 44 年発行、定価 18,000 円。この書物の大部分はツバキの園芸品種の解説と 420 図の原色写真からなる。一般の園芸書では解説が花に限るが、こゝでは枝葉に及び、葉は特に重点をおかれ、葉縁と葉脈をはっきりさせた写真があって花の各写真と対比されることは特色がある。これら数百のツバキは主として日本のヤブツバキ、エキツツバキを先祖としている。ツバキは日本の植物分布を示す代表種の一つで、単にツバキ油などの実用性、花の観賞のみにとどまらず生態的に重要な種なので、本書は品種のみならず、ツバキの形態分化、分布、生態、生理、細胞、遺伝、分類、園芸、病害、害虫、栽培の起原や歴史など多くの専門家の研究が集められ、いわばツバキ学をなしている。なお品種を記述した古版の「百花椿名よせ色付」と「つばき名よせ帖」を複刻している。図は白色、桃色、濃桃色、赤色、濃赤色、ふけや条線のあるものの順でその中では一重から半一重、二重、八重、また小花から大花へと順を追っている。

本書は欧文を主とし和文を副としている。いわば日本のツバキを広く国外に紹介している。外国でもツバキは多くもてはやされ、例えばロスアンジェルス近郊のハントン図書館、美術館附属の日本庭園傍のツバキ庭園は多数の品種を植えて一般の人を楽しませている。外国でツバキの品種がどのようにになっているか、日本の品種とくらべるのも興味のあることであって、本書は広く世界のツバキ愛好家、研究者に求められるであろう。本書のように生品をとりあつかった大著は津山氏のような情熱家にしてはじめて可能であると共に多くの人の力ぞえではじめて成功したものと思う。

(木村陽二郎)